

《開幕》

STARS展：現代美術のスターたち ― 日本から世界へ

2020年7月31日(金)ー2021年1月3日(日) 森美術館(六本木ヒルズ森タワー53階)

草間彌生、李禹煥、宮島達男、村上 隆、奈良美智、杉本博司
スターは一日にして成らず！

森美術館は、2020年7月31日(金)から2021年1月3日(日)まで、「STARS展：現代美術のスターたち―日本から世界へ」を開催します。

戦後の高度成長期、日本ではオリンピック、万国博覧会といった国家規模のイベントが続き、国際化が推進されました。その間、現代美術の世界でも、脱植民地主義、多文化主義などさまざまな議論が重ねられ、ビエンナーレやアートフェアなど新たな場が拓かれました。

本展では、この間に日本という枠を越えて広く国際的に活躍し、今日、多様な地域や世代から高い評価を得るアーティスト6名を選び、その活動の軌跡を初期作品と最新作をつなぐかたちで紹介し、彼らの実践は世界からいかに評価されてきたのか。国境や文化を越えた普遍的な課題の追求、伝統や美学、テクノロジーやサブカルチャーなど、日本固有の社会的、文化的、経済的背景を踏まえて探ります。また、1950年代から今日まで、海外で開催された主要な日本現代美術展に関する資料も展示し、それぞれの時代の評価軸や系譜を検証します。

2020年、新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより世界は一変し、経済的、社会的構造の脆弱性が浮き彫りになっています。そのような状況下、この6人のトップランナーたちの実践は、美術の本質的な役割とは何か、アーティストの成功とは何か、目指す「世界」とはどこなのか、といった根源的な問いを喚起するとともに、コロナ後の世界への示唆に富んだ力強いメッセージとなることでしょう。



草間彌生
展示風景：「STARS展：現代美術の
スターたち―日本から世界へ」
森美術館(東京)2020年
撮影：高山幸三

プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内)：八木、松川、伊藤、花上
Tel: 03-3571-5258 Fax: 03-3574-0316 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

開催概要

展覧会名:「STARS展：現代美術のスターたち ― 日本から世界へ」

主催: 森美術館

協賛: モルガン・スタンレー、鹿島建設株式会社、株式会社大林組、日本MGMリゾート、
楽天株式会社、SENSAI、ソニー株式会社、株式会社竹中工務店、株式会社きんでん

協力: 日本航空

制作協力: デルタ電子株式会社、東芝ライテック株式会社

企画: 片岡真実(森美術館館長)、近藤健一(森美術館シニア・キュレーター)、
椿 玲子(森美術館キュレーター)、徳山拓一(森美術館アソシエイト・キュレーター)、
熊倉晴子(森美術館アシスタント・キュレーター)、

矢作 学(森美術館アシスタント・キュレーター)

会期: 2020年7月31日(金)―2021年1月3日(日)

会場: 森美術館(東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー53階)

開館時間: 10:00-22:00(火曜日のみ17:00まで)

* 入館は閉館時間の30分前まで * 会期中無休 * ただし、9/22(火・祝)、11/3(火・祝)は22:00まで

* 当館の新型コロナウイルスの感染症対策への取り組みについてはウェブサイトでご確認ください。

<https://www.mori.art.museum/jp/news/2020/06/4102/>

入館料: 一般2,000円、学生(高校・大学生)1,300円、子供(4歳―中学生)700円、シニア(65歳以上)1,700円

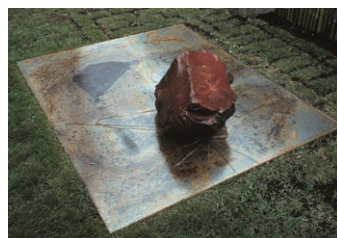
* 入館は事前予約制です。専用オンラインサイトで日時指定券をご購入ください。 <https://www.e-tix.jp/mamtcv/>

* 表示料金に消費税込 * 本展のチケットで、同時開催の「MAMコレクション012: サムソン・ヤン(楊嘉輝)」、「MAMスクリーン013: ムニラ・アル・ソルフ」、「MAMプロジェクト028: シオン」をご鑑賞いただけます。 * 六本木ヒルズ展望台 東京シティビュー、屋上 スカイデッキ、森アーツセンターギャラリーへの入館は別料金になります。

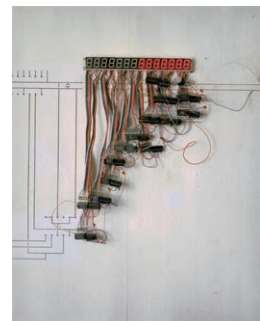
一般のお問い合わせ: Tel: 03-5777-8600(ハローダイヤル) 森美術館ウェブサイト www.mori.art.museum



草間彌生 《ピンクポート》 1992年
詰め物入り縫製布、ポート、オール 90×350×180 cm
所蔵: 名古屋市美術館



李禹煥 《関係項》 1969/1982年
鉄板、ガラス、石
180×220×40 cm



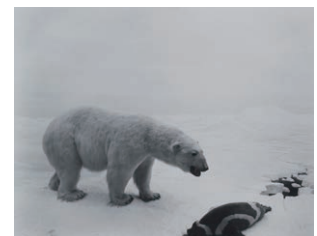
宮島達男 《30万年の時計》
1987年
発光ダイオード、電子回路、電線、他
32×21×4.5 cm
撮影: 広瀬忠司



村上 隆 《Ko²ちゃん(プロジェクトKo²)》
1997年
油性塗料、アクリル絵具、グラスファイバー、鉄
181×61×102.5 cm



奈良美智 《Voyage of the Moon (Resting Moon)》
2006年
ミクスト・メディア 476×354×495cm
制作協力: graf 所蔵: 金沢21世紀美術館
撮影: 中道 淳/ナカサアンドパートナーズ



杉本博司 《シロクマ》 1976年
ゼラチン・シルバー・プリント
42.3×54.6 cm 所蔵: 大林コレクション

プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 八木、松川、伊藤、花上
Tel: 03-3571-5258 Fax: 03-3574-0316 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

展覧会のみどころ

日本の現代美術界に燦然と輝く、世界が認める6名のスターたち、その初期作品と最近作を展示

各アーティストが、国際的に認められるようになった時期に制作した作品と、最近作または新作を各々の展示空間に並置して展示。超大物アーティストが一堂に会する、壮観かつ圧巻の展覧会が実現します。

現代美術初心者にもおススメしたい、「日本の現代美術」入門として

大型のインスタレーションや迫力の映像など、体感を重視した作品展示と、日本の現代美術の歴史や作家のキャリアについて学ぶ資料展示で五感と知識欲を刺激。美術館というリアルな空間で、現代美術ならではの実体験を提供します。

アーカイブ展示 その1——アーティストの活動歴

6名のアーティストがこれまで出展した主要な展覧会歴、カタログ、展示風景写真、展覧会評などの資料を通して、各アーティストが世界でどのように評価されてきたかを解き明かします。

アーカイブ展示 その2——海外で開催された日本の現代美術展「50展」

1950年以降、海外で開催された日本の現代美術展のなかから50展を選出し、各展の概要とともに、展示写真や当時の批評など、貴重なオリジナル資料を含めて紹介します。主催者や企画者はどのように「日本」を伝えようとしたのか。また、どのように受け取られたのか。資料のなかには厳しい批評などもあり、その道のりは順風満帆ではなかったことが伺えます。日本の現代美術の海外における受容の歴史を紐解きます。

6人のアーティストが自らの言葉で語る、必聴「音声ガイド」

アーティストへのインタビューを中心に構成された本展の音声ガイド。6人それぞれが、自身のキャリアや自作について語る、豪華かつ貴重な内容です。ウェブアプリにてご用意しておりますので作品鑑賞のお供に是非ご利用ください。



李禹煥

展示風景：「STARS展：現代美術のスターたち—日本から世界へ」
森美術館（東京）2020年

撮影：高山幸三

プレスリリース

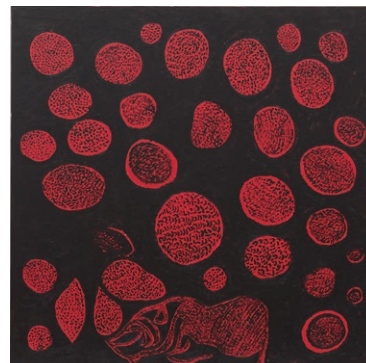
お問い合わせ 森美術館 広報事務局（共同ピーアール内）：八木、松川、伊藤、花上
Tel: 03-3571-5258 Fax: 03-3574-0316 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

出展作品・作家プロフィール

草間彌生

ニューヨークを拠点にしていた1960年頃の初期作品から、1993年の第45回ベネチア・ビエンナーレに日本館代表として出品した《天上よりの啓示(B)》(1993年)や《ピンクボート》(1992年)、鏡を用いたインスタレーション《Infinity Mirrored Room—信濃の灯》(2001年)、さらに最新の絵画シリーズ「わが永遠の魂」(2009年-)までが展示される。

1929年長野県松本市生まれ。1957年に渡米。画面全体に網目を描くネットペインティングや、布製の突起物が表面を覆うソフト・スカルプチュアを発表し注目される。これらの作品にみられる反復性は、幼少期から続く幻覚症状や脅迫観念の影響であり、草間の作品に通底する特徴を表している。1960年代後半にはファッション・ショーや反戦運動などのハプニングで話題となり、ニューヨークのアート・シーンにおいて重要な存在となる。1973年に帰国後も精力的な活動を続け、1990年代以降はパブリックアートや大型インスタレーションを数多く発表し、ポップな色彩と南瓜や草花など親しみやすいモチーフの作品は絶大な人気を博している。1993年第45回ベネチア・ビエンナーレに日本館代表として参加。1998年のロサンゼルス・カウンティ美術館とニューヨーク近代美術館の共同企画による個展「ラブ・フォーエバー: 草間彌生」を皮切りに、世界各地で大規模な個展を開催している。2011年から2012年にはテート・モダン(ロンドン)やホイットニー美術館(ニューヨーク)など欧米4都市を巡回する回顧展を開催。2016年タイム誌で「世界で最も影響力のある100人」に選出された。



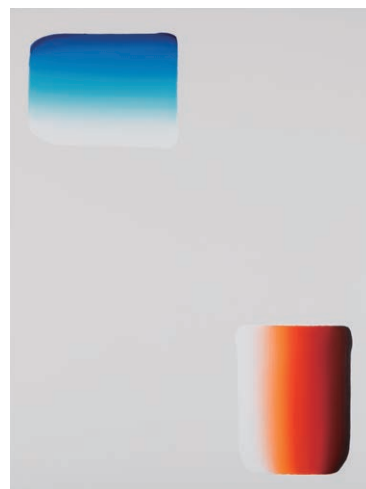
草間彌生 《たくさんの愛のすばらしさ》
2019年 アクリル絵具、キャンバス
100.3 × 100.3 cm
所蔵: 有限会社ティーパーティ



李禹煥 | リ・ウファン

「もの派」の思想を最も良く象徴する最初期作品《関係項》(1969/2020年)、立体作品《関係項—不協和音》(2004/2020年)、そして2点の新作大型絵画《対話》(2019、2020年)が出展される。いずれの作品にも、作ることと作らないこと、描くことと描かないことを作品に取り入れてきた李の姿勢が時代を超えて通底している。

1936年、韓国慶尚南道生まれ。1956年以降日本在住。日本の高度経済成長期、近代への批判が国際的にも高まるなか、生産を否定し、ものや素材そのものを提示する彫刻の動向が生まれ、後に「もの派」と呼ばれる。そのなかで李はもの相互の関係性に意識を向けた制作を行う。また、1969年には評論「事物から存在へ」が美術出版社芸術評論賞で入選。批評活動を通して「もの派」の理論化に大きく貢献した。1968年に東京国立近代美術館にて開催された「韓国現代絵画展」以降、日本と韓国の現代美術界の交流にも尽力。1971年には第7回パリ青年ビエンナーレに参加し、以降ドイツやフランスなど欧州を中心に継続的に作品を発表してきた。2011年にはグッゲンハイム美術館(ニューヨーク)で大規模な回顧展、2014年はヴェルサイユ宮殿で大規模個展、2019年にはボンピドー・センター・メス(フランス)で個展が開催されている。2010年には直島に李禹煥美術館、2015年には韓国に釜山市立美術館・李禹煥空間が開館した。日本の戦後美術への関心の拡がりや非欧米圏のモダニズムの比較研究とともに「もの派」が国際的にも再評価され、李禹煥の50年に亘る多様な実践にも注目が高まっている。



李禹煥 《対話》
2020年
アクリル絵具、キャンバス
291 × 218 cm



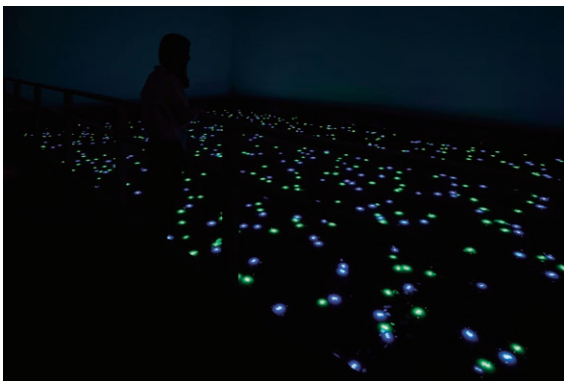
プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 八木、松川、伊藤、花上
Tel: 03-3571-5258 Fax: 03-3574-0316 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

宮島達男

出品作《「時の海—東北」プロジェクト(2020 東京)》(2020年)は、東日本大震災犠牲者の鎮魂と震災の記憶の継承を願うインスタレーションで、1988年、第43回ベネチア・ビエンナーレ「アペルト88」に出品された《Sea of Time》の発展形でもある。719個のLEDからなる本シリーズ最大級のインスタレーションとして展示される。

1957年、東京生まれ。「それは変化し続ける」「それはあらゆるものと関係をつくる」「それは永遠に続く」というコンセプトに基づき、数字が変化するデジタルカウンターを使ったインスタレーションや立体作品を中心に制作を行う。1988年第43回ベネチア・ビエンナーレの若手作家部門「アペルト88」で《時の海》を展示し国際的な注目を集め、1997年ヘイワード・ギャラリー（ロンドン）での個展をはじめ世界各地で個展を開催する。1999年第48回ベネチア・ビエンナーレでは日本館代表に選ばれる。作品では時間という普遍的な概念を扱いつつも仏教的思想やテクノロジーという要素を融合させ、国際的評価を得ている。近年では北京UCCA、上海民生美術館などでも個展が開催されている。一方で、1996年には、長崎で被爆した柿の木を源とする苗木を世界各地に植樹する「時の蘇生・柿の木プロジェクト」を始動し、2017年からは、東日本大震災犠牲者の鎮魂と震災の記憶の継承を願い、「時の海—東北」を継続的に制作するなど、社会的な参加型プロジェクトにも力を入れている。



宮島達男
《「時の海—東北」プロジェクト(2020 東京)》
2020年
防水LED、電線、集積回路、水
展示風景：「STARS展：現代美術のスターたち—日本から世界へ」
森美術館(東京)2020年
撮影：高山幸三



Photo Courtesy: Lisson Gallery

村上 隆

オタク文化を象徴する代表作《Ko²ちゃん(プロジェクトKo²)》(1997年)と《ヒロポン》(1997年)、《マイ・ロンサム・カウボーイ》(1998年)の等身大フィギュア彫刻から、東日本大震災への応答として制作された鬼の巨像と新作ビデオ作品、さらには本展のために描かれた約20メートルの大型絵画2点ほかを出品する。



村上 隆 《チェリーブロッサム フジヤマ |APAN》 2020年
アクリル絵具、キャンバス 500×2,125 cm



Photo Courtesy:
Museum of Fine Arts, Boston

1962年、東京生まれ。日本の伝統絵画と現代美術の源流をアニメ・マンガの視覚論を通して再構築する「スーパーフラット」論を提唱。Ko²ちゃんとDOB君など、おたく文化を反映したキャラクターを多く生み出し、キッチュ性の高い彫刻作品と西洋の透視図を対極とする超二次元的な絵画を発表している。村上のサブカルチャーを基盤とする文化論は、高級/低俗のヒエラルキーを解体するだけでなく、戦後日本人の心理を批評的に描き出し、グローバル化が進むアート・シーンに日本固有の言説を確立した。また、ルイ・ヴィトンとのコラボレーションや、ストリートカルチャーと現代陶芸に着目した活動を通して、現代美術の垣根を超えた観客層を世界中で獲得し続けている。2005年に自身が企画した「スーパーフラット三部作」の最終章「リトルボーイ展」(ジャパン・ソサエティ、ニューヨーク)は、全米批評家連盟によるベストキュレーション賞に輝いた。2007年から2009年には初の回顧展「©MURAKAMI」がロサンゼルス現代美術館を含む欧米4都市を巡回。2010年以降は、ヴェルサイユ宮殿、アルリワク展示場(ドーハ)、森美術館、ガラージ現代美術館(モスクワ)、大館(香港)など、世界中で個展を開催している。

プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 八木、松川、伊藤、花上
Tel: 03-3571-5258 Fax: 03-3574-0316 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

奈良美智

初公開の15点を含む初期1980年代から近年までのドローイング約20点、コラボレーションなどで幅が広がった中期の代表的なインスタレーション作品《Voyage of the Moon (Resting Moon) / Voyage of the Moon》(2006年)、新作《Miss Moonlight》(2020年)を含む大型肖像絵画、そして奈良本人の多様なコレクションなどが展示される。

1959年、青森県弘前市生まれ、栃木県在住。ドローイング、絵画、彫刻などを制作している。子供、動物、植物などが頻りに登場する作品群は、親しみやすさと神聖さ、無邪気さと残酷さなど、一見相反する性格を共存させ、観るものの想像力を刺激する。日本の「かわいい」文化を体現するものと捉えられることもあるが、こうした不安定で力を持たない主人公たちは、辺境や境界で生きるものたち、権力構造を逃れる自由な精神の代弁者なのである。音楽への造詣の深さと愛、ポップカルチャーと現代美術の接続を行うようなジャンルを超えたスタイルでも知られる。1980年代後半に作家活動を開始し、1988年から2000年まではドイツを拠点に活動。日本に帰国した2000年には、シカゴ現代美術館やサンタモニカ美術館(現インスティテュート・オブ・コンテンポラリーアート・ロサンゼルス)で個展を開催するなど、欧米での評価を確かなものにす。2001年には国内初の大型個展が、横浜美術館を始め国内5都市を巡回し、2000年代には、韓国、中国、台湾のみならず、東南アジアでも注目が高まり、2015年にはアジア・ソサエティ香港センターで個展を開催。2020年にはロサンゼルス・カウンティ美術館での大規模な個展、2021年には、ダラス・コンテンポラリーでの個展が予定されるなど、近年益々評価が高まっている。



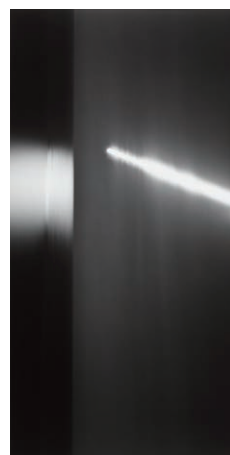
奈良美智 《Miss Moonlight》
2020年 アクリル絵具、キャンバス
220 × 195 cm



杉本博司

初期の代表的なシリーズのひとつ、「ジオラマ」の最初の作品《シロクマ》(1976年)(1977年にニューヨーク近代美術館に収蔵)、「海景」シリーズが発展した日本初公開の「レボリューション」シリーズ(1980年-)、杉本の創作活動の集大成とも言える「江の浦測候所」(2017年開館)の四季折々が細部まで納められた初映画作品《時間の庭のひとりごと》(2020年)が展示される。

1948年、東京生まれ。1970年に渡米しロサンゼルスで写真を学んだ後、1974年にはニューヨークに移住。現実と虚像の間を往来する「ジオラマ」、「ポートレート」、映画一本分の長時間露光による「劇場」、世界各地の水平線を撮影した「海景」など、初期から一貫して明確なコンセプトに基づいた写真作品を制作。1977年、初めてのパブリックコレクションとして「ジオラマ」シリーズから《シロクマ》(1976年)がニューヨーク近代美術館に収蔵される。その後、1995年から始まったメトロポリタン美術館(ニューヨーク)の個展が米国内及びハラ ミュージアム アーク(群馬)に巡回し、大きな注目を浴びる。2005年、森美術館での個展「杉本博司：時間の終わり」は米国3都市に巡回。固有のコンセプトと哲学、美学を兼ね備えた写真作品が美術館と市場の双方で確固たる立ち位置を確立する。その後、彼の壮大な世界観や歴史観は写真メディア、さらには現代美術に限定されことなく、近年の表現は建築、伝統美術、古典芸能など幅広い芸術領域を横断している。なかでも2017年開館の小田原文化財団 江之浦測候所は、構想から20年をかけたもので、その世界観が凝縮された壮大なプロジェクトは世界から注目が高まっている。



杉本博司 《Revolution 008 カリブ海、ユカタン》
1990年 ゼラチン・シルバー・プリント
238.8 × 119.4 cm



最新のプレス画像は、こちらの URL より申請、ダウンロードいただけます。 <https://bit.ly/32Wtd4c>

プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 八木、松川、伊藤、花上
Tel: 03-3571-5258 Fax: 03-3574-0316 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

?! 展覧会関連プログラム

出展作家によるアーティストトークやオンラインでのプログラムなど、さまざまな企画を予定しています。最新情報、お申込みは森美術館ウェブサイトをご覧ください。

プログラムに関するお問い合わせ: 森美術館 ラーニング担当

Tel: 03-6406-6101 (月~金: 11:00-17:00) Fax: 03-6406-9351 E-mail: mam-learning@mori.co.jp

関連情報

■ 展覧会カタログ

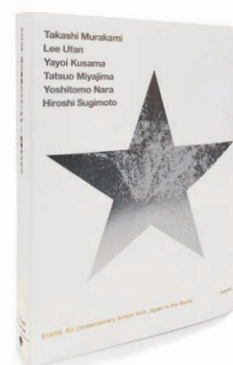
論考執筆者:

片岡真実(森美術館館長)、近藤健一(森美術館シニア・キュレーター)、
椿 玲子(森美術館キュレーター)、徳山拓一(森美術館アソシエイト・キュレーター)、
矢作 学(森美術館アシスタント・キュレーター)、南條史生(森美術館特別顧問)、
アレクサンドラ・モンロー(ソロモン・R・グッゲンハイム美術館アジア美術部門サムソン上級キュレーター/グローバル美術部門上級アドバイザー、グッゲンハイム・アブダビ美術館準備室学芸部門統括部長)

サイズ: A4変形(28.2×21 cm) **ページ数:** 312ページ(予定)

言語: 日英バイリンガル **価格:** 3,300円(税込)

発売日: 2020年9月下旬(予定) **制作・発行:** 森美術館/株式会社美術出版社



お問い合わせ: 森美術館ミュージアムショップ

Tel: 03-6406-6118 営業時間: 10:00-22:00(祝日を除く火曜日は17:00まで) ※美術館の開館時間に準ずる

■ 音声ガイド

全6作家へのインタビューを中心に構成。ウェブアプリにてご用意しています。

※会場内のみでご利用可能です。ご自身のスマートフォンをご利用ください。

※スマートフォンやイヤフォンの貸し出しは行っておりません。

ガイド件数: 全14件

解説時間: 約30分 **言語:** 日本語、英語 **料金:** 500円(税込)

※草間彌生氏のインタビュー音源につきましては朝日新聞社にご協力いただきました。



プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 八木、松川、伊藤、花上

Tel: 03-3571-5258 Fax: 03-3574-0316 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp